

御霊の現われ 1 コリント 12:1-7

1. さて、兄弟たち。御霊の賜物についてですが、私はあなたがたに、ぜひ次のことを知っていただきたいのです。ご承知のように、あなたがたが異教徒であったときには、どう導かれたとしても、引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした。ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。(12:1-3)
 - a. この手紙の少なくともこの先二章は霊的賜物の重要性を教会に教えるために書かれている。パウロは霊的賜物は教会に不可欠なものなので、コリントの人々に「知らずにいてもらいたくない(口語訳) “do not want to be uninformed”」のである。
 - b. ただし、パウロがなぜこのことについて書いたのか正確にはわからない。考えられる理由としては、教会に賜物を乱用する者がいた、異言を用いる者を過度に尊敬する風潮があった、教会の分裂を起こしていた、霊的賜物を用いないように働きかける人たちがいた、などであろう。
 - c. 霊的賜物を用いてはいけない、と言っていた人たちは、おそらく聖霊の働きとは主を知る前の霊的体験、すなわち感情的な高揚であると考えていたのかもしれない。
 - d. パウロはそれらの人たちに、霊的体験も確かな御霊の現われであることを確信させようとしている。
2. さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。(12:4-6)
 - a. 霊的賜物、または御霊の現われの理解には少なくとも三通り— 賜物、奉仕、働き(活動)— がある。パウロは賜物は御霊から、奉仕(ミニストリー)は主から、働きは神から来ると指摘している。
 - b. もしそれらが同じものなら区別する必要はない。ただしパウロはこの三種類の違いを詳しくは述べていないし、分類のリストのようなものもない。
 - c. 私の考えでは、賜物(ギフト)という名の通り、ただ神の恵みによる御霊の現われもあれば、ミニストリーとして用いられる主からの御霊もある。そして神の働きとは恵みの賜物を含めたミニストリーとしてこの二つを超えたものではないかと思う。
3. しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。(12:7)
 - a. これらの違いを説明するのは難しい。しかしあえて説明されていないのは、これらの賜物は御からだを一つにするためのものであり、分けるためのものではないからではないだろうか。
 - b. 聖霊がくださる賜物はすべての人のためにある。すべての人に賜物と使命が与えられている。役目には大小あるかもしれないが、どれも重要で尊いものである。
 - c. これらの賜物は御霊の現われであり、御霊に満たされる時自然と私たちのうちから出て来るものである。また私たちが御霊の賜物を用いる時、周りの人々にも御霊が現れてくださる。